
父とわたしと母の遺言

I f

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父とわたしと母の遺言

【Nコード】

N4637F

【作者名】

If

【あらすじ】

わたしは父のことが大嫌いだ。母が死んでからそう感じるようになった。というのも、父は責任感が強いゆえにわたしのことを拘束して自由を与えてくれない。そんなある日、わたしは思い切って父の定めた門限を破ることに……。

わたしは父のことが大嫌いだ。

母がいらないせいなのか、やけにわたしにうるさい。いや、ただ注意してくれるだけならいいのだ。だけど、それに留まらないでいつまでもネチネチしつこいから嫌になってくる。

母はわたしが生まれて間もない頃に死んだ。だからわたしは母を写真でしか見たことがない。

一体どんな母だったのか聞きたいところだが、生憎父とは口を利きたくない。

なぜわたしには自由がないのか、一回父にそう尋ねたことがある。しかし、父は淡々と「これが普通だ」と答えただけだった。

そんなことはない。みんな門限なんてないし、結構自由に遊びに行けたりする。

だけどわたしには束縛された家での生活のほかを知らない。

そんな束縛された日々から抜け出さなくてはちよつと冒険をした、ある日の夜のこと。

父は玄関で待ち構えていた。

わたしはその日友達と遊んで、家に帰った時には門限などつくに過ぎていた。

「……ただいま……」

何の問題もないとでも言うかのようにわたしは靴を脱いで玄関を上がり、自室へ行こうとした。

「ただいまじゃないだろ」

案の定父に止められ、わたしは彼の方へ向く。

「……どうしたの？ 何かあった？」

あくまでも何事も無かったかのようにそう尋ねる。父は機嫌が悪いらしく、腕組みをしながら仁王立ちしていた。

「どうしたじゃないだろ。門限はどうした？」

「ああ、門限。ごめんなさい、ちよつと遅れちゃって……」

「ちよつと？　そういう時間じゃないだろ。友達と遊んでたのか？」

「うん、そうだけど……」

「くだらない。今後そういう奴らと遊ぶんじゃない。それと、もし遅れるならちゃんと電話をよこせ。それから……」

くどくどと父の説教は続く。

何で私だけ？　わたしだって息抜きして精一杯遊びたいのに。その結果遅れちゃったのに。それに友達のことをバカにするなんて……何も知らないのに、何が言えるの？

「……なんか気分悪い。話の続きは明日聞くから……」

そう言いながら階段を昇っていく。

「おい、ちよつと待て、話はまだ……」

父が私の腕を掴んだ瞬間、わたしの中の何かがはじけた音がした。

「……何が分かるの？」

「あつ？」

「わたしの何がわかるのよ！　結局は表しか見てないじゃない！　わたしの考えたことある？　わたしの自由を奪っているってどうして気付かないの！？」

今まで心の中に溜まっていたものが、全て表に吐き出された気がした。それを聞いて父は気色を悪くする。

「わたしの友達をバカにしないでよ！　会ったこともないのに何が分かるっていの！？　ねえ……」

「……友達をバカにしたことはすまなかったと思う。だが、ほかの事は……」

「結局そうやって上辺だけで謝ってるだけじゃない！！」

わたしはそのまま階段を駆け上がる。

「おい、ちよつと待て！」

追いかけてくる父に、わたしは言い放った。

「あーあ、わたしなんて生まれてこなければよかったのに……」

パン。

乾いた音がし、数瞬遅れて痛みが頬に走った。

その日、わたしは初めて父に叩かれた。

わたしはピリピリと痛む頬を押さえながら、

「何よ！ 言う事聞かないなら暴力に走るわけ！？」

「……………謝れ」

「えっ？」

わたしと父の会話は全くと云っていいほど噛み合っていなかった。

「母さんに謝れ！」

「はっ？」

何でここで母が出てくるわけ？ 訳わかんない。

父は体を震わせて言葉を紡ぐ。

「……………ずっと黙ってたけどな……………母さんは、お前を産んだ時に……………死んだんだ」

「えっ……………」

初めて聞いた事実だった。

母は、わたしを産んで……………。

「元々産める体じゃなかったのに、『それで殺してもいいのか』って、母さんに泣かれて……………」

父の震えは、怒りから来たものではなかった。彼は泣いているのだ。

「出血多量だよ。それでお前だけ残して、逝っちまった」

気付けばわたしの頬を涙が伝っていた。

わたしが……………母を殺したんだ……………。

「それでな。死ぬ寸前に、俺に『子供のことは任せたよ。立派な子にしてね』って、それだけ呟いたんだ……………」

「……………」

「なあ、俺は母さんに何て言えばいい？ それで産まれなかった方

がいいなんて言われたら、俺は母さんに何て謝ればいい!？」

父はそう言ってその場にしゃがみこんだ。そして拳で階段を殴る。わたしはどうしていいか分からなくなって、母の眠る仏壇へと向かった。

「……ごめんね、お母さん。ごめんね……」

いくら上手い言葉を言おうとしても、口からは「ごめんね」の一言しか出てこなかった。

そして次第に涙の量が多くなっていき、畳に染みを形作っていった。

閉めたはずのふすまが開く音がした。それは、見る間でもなく父だった。

「なあ、言わないでくれよ。どんなことがあっても……『産まれなきゃよかった』なんて……」

父の声はまだ震えていた。きっと、本当にわたしがあんなことを言ったのが悲しく、悔しかったのだろう。

わたしは頷き、仏壇の前で頭を下げる。

「……もう言わないよ。『産まれなきゃよかった』なんて。産んでくれてありがとう!」

わたしは仏壇の前で号泣したまま、しばらくその場にいた。すぐ後ろで、父も泣いていた。

仏壇の写真に写る母は、ずっと笑顔でわたしの事を見つめていてくれた。

それからというもの、わたしは父と喧嘩をしていない。

父も門限を少し緩くしてくれたし、少しばかりの自由をくれたので、これからも喧嘩をしないで済みそうだ。

わたしは母の遺言どおりに、立派な子になろうと思う。

それまで天国で見えてくれるといいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4637f/>

父とわたしと母の遺言

2010年10月8日15時53分発行